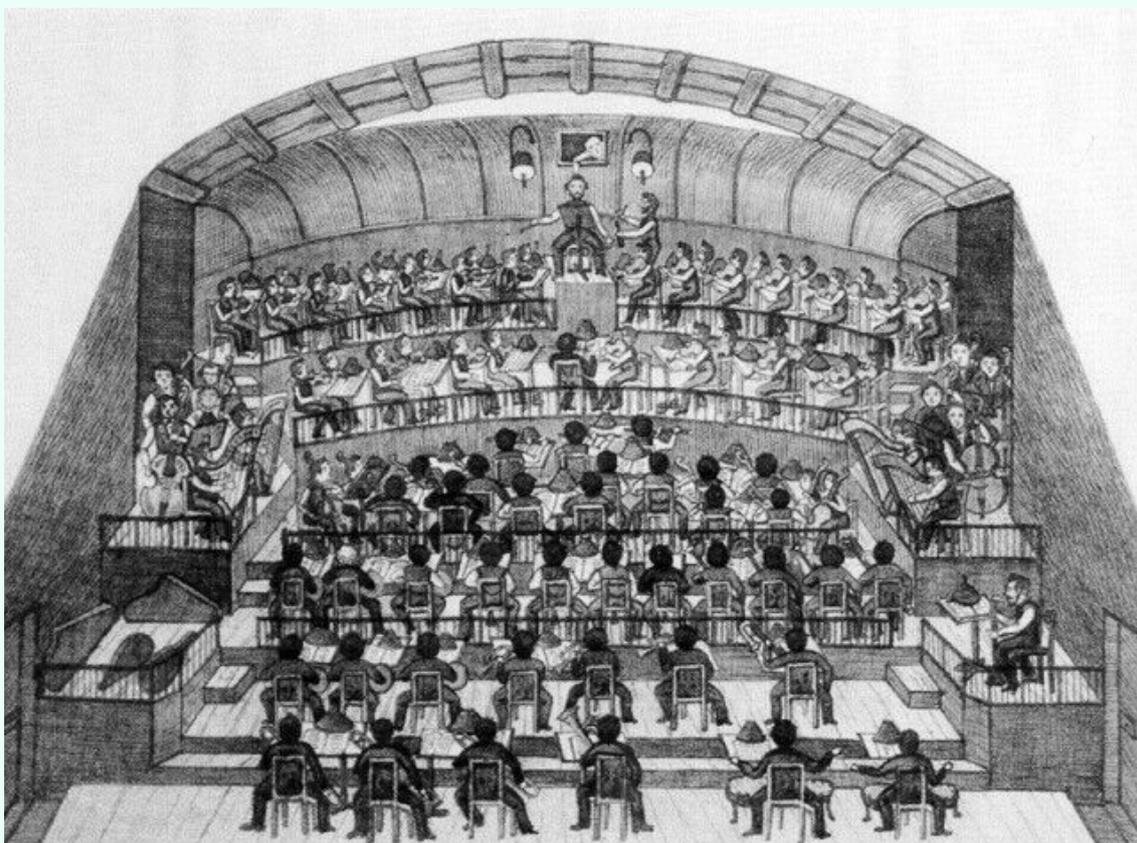


ああ、懐かしきバイロイトの響きよ!

2022/04/04



この4月の春期からNHKの土曜講座では、「ワーグナー劇場」と銘打ってワーグナーの作品ばかりをみえています。春期は、4月から9月までの半年は、《ローエングリン》と《トリスタンとイゾルデ》と《恋愛禁制》です。先の土曜日4月2日、初めての講座が終わってから受講者の方からメールをいただきました。嬉しいです。

バイロイト・トーンについて

ホームページは見ましたが、まだ精読まで入っていませんので、なるべく早く読ませていただこうと思っています。土曜講座はワーグナーからとのことで今回のローエングリンやトリスタンなどは、良く知らないのもので楽しみにしています。

先日のローエングリンはバイロイト祝祭歌劇場の収録でした。バイロイトの音は劇場の構造から独特の音になると聞いています。先日の録

画の音は特にそういった音ではないように思いました。先生は実際のバイロイトの音を聞かれたとのことですが、どうですか。教えていただけると幸いです。よろしくお願いします。

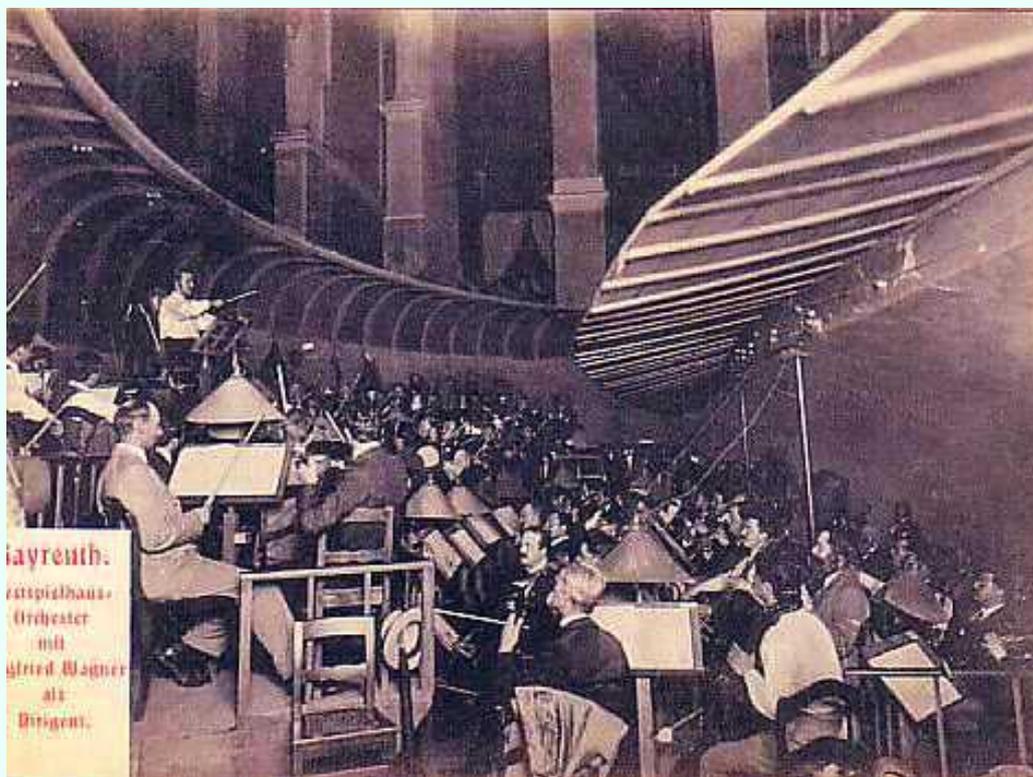
「待ってました」とばかりに、早速、ご返事をさし上げました。

こんばんは。いつも、ご熱心にご受講いただきありがとうございます。また、メール、ありがとうございます。先の《影のない女》の「Ich bin nicht (mit Schatten !)」や「山桜花」など、助け船を出していただきありがとうございました。感謝しています、

今日のワーグナーの「バイロイト・トーン」についてのお訊ねのメールですが、録音されたCDやDVDなどの媒体では、残念乍らその響きは分かりません。私も、そのことは、実際に、バイロイト劇場に座って初めて体験しました。それは、異常な体験でした。

真夏の音楽祭異聞

バイロイトの音楽祭は、暑い真夏に開かれます。《ラインの黄金》が始まる時に、ホール全体が暗くなり指揮者やオーケストラの姿は舞台の下の空間（オーケストラ・ピット）に入っていて客席からは見えません。この、オケ・ピの独特の構造こそ、このバイロイト祝祭劇場の売りなのです。指揮者の入りも見えないので、当然、拍手はありません。客席から見えないことを良いことに、指揮者をはじめ、演奏者は全員、ステテコ姿で演奏しています。ウソです。(笑い)



場内の照明は全く消えていて、辺りは鼻を摘ままれてもわからない真っ暗闇です。しばらく、シーンとして待っていると、なんだかブルブルと足下からかすかな「ZZZZ……」という振動が伝わってきました。「真夏なのでクーラーを入れたな。音楽ホールなのに」と思っていたら、その振動が次第に低い暗い弱い太い音に変わっていきました。「あっ、これはコントラバスの音だ。音楽がもう始まっているのだ」と気がつきました。なんと、8台のコントラバスが静かに「変ホ音」を奏していたのです。

天地創造の瞬間を実感

そうしたら、そのコントラバスの低い低弦の上にチェロが「倍音」（五度やオクターブ上の響き）で鳴り始めたのです。これは音と言うよりも、振動であり、響きでした。この《ラインの黄金》の始まりは、地球が創られていくときの根本の存在としての原始の響きで始まるのです。このコントラバスの「変ホ音」は前奏曲が終わるまで、ずーっと鳴り響き、劇場の空間、すなわち世界中に倍音を出し続けます。この根音の上に、地球が、世界が、神話が創られていくのです。



そして、そこにファゴットが加わって「ド+ソ」の空虚な完全5度の響きを作り、さらに大きな広い空間が、具体的な物理的な自然空間として私たちの周りに作られていきます。海や陸や空をもつ地球が誕生したのです。「音＝音楽」ではなく「物理的な存在としての響き」「物質としての響き」が必要だったのです。それも、「倍音」という、自然界にある響きで、です。



ワーグナーは、この「音楽よりも物理的な響き。それも倍音で出来ている響き」、すなわち、「自然界の響き」が欲しかったのです。「音楽ではなく劇を聴かせたい」というのが、「オペラではなく楽劇を」というワーグナーの念願でした。

ただし、この「舞台下オケピット案」も素晴らしいアイデアなのですが、実際の演奏には、色々問題があるようです。舞台上の歌手の声は、そのまま客席にオン・タイムで届くのですが、舞台下のオーケストラの音は、ワンクッションを得て、客席へ届きます。どうしても声とオケとの間にタイム・ラグが生じるのです。肝心の「アインザッツ」が揃いません。副指揮者を複数名

置いて上演する場合もあるようです。

思いがけない発見

劇場の機構によって、この「音楽ではなく劇」への転換が可能だと思ったのは、ワーグナー夫妻が借金に追われてドイツを離れ、パリにやって来た1839年(26歳)のことでした。

ワーグナーは、「パリの音楽院の管弦楽演奏会には時折出掛けた。ある時開演の時間に遅れ、彼はステージのすぐ横の部屋で待たされた。オーケストラとは一枚の反響板で隔たれていたが、その反響板はオーケストラの音を観客席の方に送り込むため作られたものであった。その反対側で聞いたワーグナーは、普通と違った柔らかく、くすんだ音に驚かされ、こうした音響を彼の考えている劇場に生かしたらどうかなどと思った。実際この考えはのちのバイロイト劇場で現実化されることになる」

— と私の恩師の渡辺護がワーグナーの伝記で書いています。

それで、バイロイトのオーケストラ・ピットは、板（なんとこの板は舞台の床板です）を隔てて、客席へ届かせる様に作られているのです。ですから、この響きは、実際に現場のバイロイト劇場へいかなければわかりません。ぜひ、お出かけください。願いは、願えば叶うものです。若い頃から、「ワーグナーのことに詳しく観てもいず」という句を作ってバイロイト行きを企てていました。もう、家内を連れて、3回もいきました。

ご馳走さま

ある年、私がバイロイトへ出かけたときのエピソードをひとつ。劇場内の公園に郵便局があります。ここから日本の仲間に絵葉書を沢山送ろうと郵便局へ入ったのですが、混んでいたので切手だけを沢山買いました。外のベンチで、切手を嘗めながらハガキに貼っていました。隣に座った美人の外国の貴婦人も、同じように舌を出して切手をハガキに貼っていました。思わず、小声で、「Schmeckt mir sehr gut!」といいました。突然、その女性が、「ワ〜ハッハッハッ!」と大笑いをしました。周りのみんながこちらを見ました。私の仲間の日本人も、その女性の仲間も、こちらを見ました。日本人は、「あいつ、また、やってるわ」という顔をしていました。ドイツ語とは、変な言葉で、「これは美味しいです」や「ごちそうさま」と言うときには、「私が、それを、美味しく味わった」ではなく、三人称の「es」（英語の it）を主語にして、「それが、私を、美味しくさせる：Es schmeckt mir sehr gut!」というのです。そのとき、私が言ったときの「それ」（es=it）は郵便切手をさします。その貴婦人の仲間が集まってきたので、その貴婦人はわたしのことを指さして説明していました。また、大きな笑い声が、公園中に響きました。私は、素知らぬ顔をしてポストへ沢山の絵葉書を投函しにいきました。

女性には敵わない

「女の方は大概トリスタンは好きなのではないかと思います」とも仰っておりますが、当然です。なにごとも、女性には敵いません。なんと言っても女性は、①忍耐力があります。②感性が違います。耳も敏感です。耳だけでも生きていけます。《トリスタンとイゾルデ》は耳の芸術です。

長々と長話をいたしました。今回の土曜講座は、「ワーグナー劇場」です。《ローエングリン》と《トリスタンとイゾルデ》と《恋愛禁制》をお楽しみください。ああ、それから、木曜講座の《オルフェオ》も《天国と地獄》も《カルメル会修道女の対話》も《アルジェのイタリア女》も面白いです。ご期待下さい。

都築正道